

織田信長の性格について語ります。

日本の歴史上もっとも人気のある人物が織田信長と言われることが多いのです。

尾張国（愛知県）半国の地盤を親より引き継ぎ、30年ほどで戦国時代をおさめ、ほぼ日本を統一した英雄として有名です。

彼の戦略や戦術や戦いぶりについての分析は、太田牛一（信長の家来）が著した「信長公記」等を種本にして多くの解説書、物語、小説が江戸時代以降今日まで出版されています。

ここではそれには触れません。

人気の元である織田信長の性格、気性。人なり心情について語りたいと思います。出典は日本史学の一級史料とされています「信長公記」と「フロイスの日本史」（以後「フロイス」と言います）からです。

「信長公記」は信長の家来であった太田牛一が著したもので、「フロイスの日本史」は、ポルトガル人の宣教師ルイス・フロイスがポルトガル語で書き著した本国への報告書です（松田毅一・川崎桃太郎の訳があります）。いずれも当時、信長に面談した上で、もしくは側近の者から聞き取った話が主ですので、信憑性が高いと評価されています。

それでは先ず信長の風貌です。

「中くらいの背丈で、華奢な体躯であり、ひげは少なく、声は快調」（フロイス）

肖像画が残っています。信長が死没後に描かれたものです。別紙をご覧ください。ここでは代表的なものを二点あげます。

二点を比べますとイメージに大分違いがあります。どちらが本当に近いのか分かりません。こんなに違うのは絵の発注者が画家に自分のイメージを指示して描かせたことによるものと言われています。

フロイス以外に彼の風貌を言葉で表現したものはありません。フロイスは本国への報告のために書いたのが「フロイスの日本史」ですから信長の風貌についてうそを書く必要はありませんし、信長とは何度か対面していますのでまあ間違いないでしょう。

次に彼の難しい性格です。

残虐、残忍性について強調されます。

例えば比叡山の攻略で延暦寺の僧たち数千人を殺したことがあげられます。これについて彼を弁護しましょう。

比叡山を焼き討ちし、延暦寺の僧等関係者への虐殺です。この事件は1571年（元龜2年）のことですが、背景があります。比叡山延暦寺が信長の当面の最大の敵である朝倉・浅井連合軍に味方し、陣地の提供などしていました。

信長は延暦寺に対し、「味方になるかせめて中立を保て。そうすれば所領の安堵もする。もし朝倉、浅井連合軍に引き続き味方するなら焼き討ち、皆殺しにする」警告を出していました。

叡山は判断を誤りました。朝倉、浅井連合軍が助けに来てくれる。そうでなくとも信長が本当に実行するとは思わなかったのです。

信長は誰にたいしても有言実行です。そうでなくては戦国時代を脱却し、天下を統一出来ないと考えたのです。

残虐性がないと言うとうそになるでしょう。

しかし当時の武将（政治家）もその後の世界の政治家も敵となれば残虐行為をして来ました（第一次大戦、第二次大戦等）。彼だけが残虐性を持っていたとは言えないでしょう。

激情家であった点です。

1551年（天文20年9月）信長18歳の時に、尾張国半国に支配を広げた強い父信秀（41歳）が病没します。信長の家督は決まっていたましたが、その地位は危うく大変な時に死んでしまったことで父親を恨みました。

葬儀の時、「長い柄の太刀を縄で腰にくくり、髪は鬚を結わず、茶筌に巻き立て、袴もつけずに、仏前に来て抹香をつかんで仏前へ投げかけてそのまま帰った」と「信長公記」に記述されています。

これで信長は内外で評判を落とします。信長は父親の死を悼む気持ちはあったでしょうが、大変な時期に亡くなってしまった父親への恨みがほとぼしってしまったのでしょう。激情型の人間であったのです。

短気 即決で規律に厳しいことが言えます。

信長は上洛にあたって軍律を厳しくし、京で狼藉を働いてはならないと兵に告げました。ある日兵の一人が京の町中で通りすがりの女性をからかっていた。たまたまその場を見た信長は直ぐにその兵を取り押さえさせ、即座に首をはねさせました。（「信長公記」より）

これには京の公家、町民も驚いた事でしょう。そして彼らは信長の京支配における治安に安心しました。

短気については「フロイス」には、対談の際、遷延することや、だらだらした前置きを嫌ったとあります。

又、「彼は性急であり、激昂するが平素はそうでもなかった」と記しています。

「フロイス」によると「信長はいくつかのことで人情味と自愛を示した」とあります。

この例を「信長公記」より例を見ますと、「信長が岐阜から京への往復の折に岐阜と近江の境辺りで障害者が雨にうたれて乞食をしているのを見て、木綿二〇反を与え、同じ郷の者へ毎年麦が収穫の時に、又米収穫の時に施すように指示された」旨の記述があります。

弱者への憐憫の情を持っていた例です。

宗教観はどうだったでしょうか。

「フロイス」では、「神仏への礼拝を行わず、尊崇はしない。異教的占トや迷信を軽蔑する人間」としています。

信長の行動を見て見ますと、信長に反抗する宗教団体（比叡山延暦寺や一向宗等）には厳しく弾圧しますが、信長に反抗しなければ耶蘇教（キリスト教）を含めて宗教には寛大であったと思われます。

わけのわからぬ化け物を暴こうとすることは熱心です。「信長公記」によると尾張の国の清州城（当時の彼の居城）の近くの村の池に恐ろしい化け物が住んでいるとの風聞がありました。信長は池の水を相当汲み出したところで、自ら池に潜り、化け物を探し、更に家来に潜らせましたが発見されず、以後化け物騒動はなくなりました。

もう一例同じく「信長公記」からです。

「信長は“無辺”と言ういかがわしき僧が安土城下で「丑時（午前二時から四時）大事の秘法」として病者や子を産まぬ女に祈祷を行っていることを聞き、城に召し連れ取り調べをされた。信長が生国を聞くも、無辺とか修行者と言って答えず、そこで信長は火あぶりの準備をせよと家来に言ったところ、僧は出羽羽黒山と答えた。女、童を惑わすけしからぬ奴として誅せられた」

世を惑わすいかがわしい宗教の布教やまやかし・迷信は許せない性格だったのです。

既存の伝統的な仏教、神道、キリスト教は信長に敵対しなければを差別なく布教を許します。本人にどれ位信仰心があったかは疑問です。高僧には礼節を尽くします。

司祭ルイス フロイスが修道士ロレンソ（日本人）と共に岐阜城を訪れた時、信長は食事の接待に当たって、彼自身と息子で食膳を運び二人に渡したとあり

ます。西洋では食事を運ぶのは下々の給仕の役です。この信長の接遇には感激し頭上に押し頂いて頂戴したとあります。まあ日本でも殿様は、給仕はしません。

その外に「フロイス」では信長の性格を次のように語っています。

忍耐強く理性と判断力を有している。彼はほとんど家臣の忠言を聞かなかった。

趣味は、「信長公記」も「フロイス」も茶の湯（茶器）、馬、鷹狩、相撲をあげています。当時インテリーの侍も好んだ和歌、連歌はやらなかったようです。

舞は能より幸若舞を好みました。信長自身も“敦盛”を舞ったと「信長公記」にあります。（謡は“……人間五十年、下天の内に比ぶれば、夢幻のごとく也……”で、桶狭間の戦いに向かう前に舞ったことで有名です）

信条としては、自らを律しながらも、己の見解には尊大で公家、家臣に対しては絶対君主としてふるまいました。もちろん信賞必罰です。働きが良いと新参、古参を問わず、出自にかかわらず起用、昇進させます。

下級の身分からの登用は豊臣秀吉や明智光秀が代表的です。一方働きが悪いと歴代の重臣でも追放です。家老格の佐久間信盛や林佐渡守は追放されました。

生活においては、睡眠時間は短く、早朝に起床、酒は飲まず、食を節したとあります。

古今東西英雄と言われる人物は多く存在しますが、日本では信長の人気が一番と言われるのは、もちろん戦いに強かったこともありますが、この気性です。

残虐性、激情、性急、短気、規律に厳格の性格を持ち、弱者に憐憫の情、訳のわからぬまやかしを許さぬ理性、忍耐強い、独裁、絶対君主としての尊大、信賞必罰、自らの生活の節制を信条としています。

この性格、気性、信条から信長をカリスマ性的資質持つ超人と言うのでしょうか。しかし今日、信長は好きだと言う人も上司とするにはちょっと困ると言う人も多いようです。

以上

2015年5月6日

梅 一声



織田信長肖像 三河長興寺 狩野宗秀作



織田信長肖像 狩野永徳作